

(論文の要旨)

文化への参加に導くことばの入門期指導  
-外国人児童への指導を中心に-

広島大学大学院教育学研究科 博士課程後期  
学習開発専攻 カリキュラム開発分野

妹尾 知昭

2015

## 1. 研究の目的

本研究は、外国人児童を中心としつつ、特別な支援が必要な児童や学習が遅れがちな通常学級の児童も含めて、これらの、ことばの学びが特に必要な児童が、文化の営みに参加することができるために、ことばの入門期においてどのような指導が必要かを考究するものである。ここでいう文化の営みへの参加とは、狭くは日本の小学校でくりひろげられる各教科・領域の授業を指し、広くは学校内外におけるさまざまな活動（学校生活や社会生活の営み）を指す。そういう文化の営みに、ことばの学びが特に必要な児童が容易に参加できるようにするために、どのような教育内容・教材・方法を持ってことばの教育を行えばいいかについて、考えていく。

本研究は以下の5点を目的とする。

### ① 【目標論】

実践の場における指導内容の不十分さを指摘し、新しい言語教育観を提示する。

### ② 【内容論】（文法と語彙）

国語科における教育文法の不備を指摘し、それを補完するために新しい文法観を提示する。日本語は主語-述語といった構造を持つ言語ではなく、述語を中心とし、かつ様々な名詞群と修飾要素から構成される性質を持つ言語である。それらが集合して文を成す。文という形式に至るに及んで、その文の「形式的」な適否を基本文型という考え方により補完する。また、文型を仮に骨組みと考えると、それに付ける肉として語彙も必要となってくる。特に従来より指摘されていることだが、非漢字圏の外国人児童にとって漢字語彙を拡充させることには大きな困難が伴う。本研究では、漢字語彙を拡充する方策について述べる。

### ③ 【教材論】

外国人児童特有の問題、すなわち教育場面で補助言語を使用することができないという問題がある。母語が習得された後に学ぶ外国語であれば、当該母語を補助言語として使用することが可能である。しかし、児童の場合、母語という基礎が確立していないことが多々あるため、教える側も日本語だけに頼らざるを得ない。そのような状況に必要な具体的な教材として、リライト教材による支援の方法について検討し、具体的なリライト案を提示する。

### ④ 【方法論】

これらの成果をもとに、「ことばの学びが不十分な学習者」を対象とした教育方法を構想する。

①②ではことばの学習に「本当に」困難をおぼえる学習者として外国人児童という極端な例を

対象に考察を進めたが、ここで抽出された方法論が特別支援教育、ないしは通常学級における学習において、学びに対して困難を感じている児童にも適用する可能性を検討する。

具体的には、通常学級において日本人児童を対象にテキストシャドーイングを行った結果について考察を行い、特別支援教育や通常学級へのテキストシャドーイングによる支援の適用可能性について検討する。

#### ⑤ 総合的な実践

H 県 B 小学校の通常教室で実施したシャドーイングの実践事例をもとに、本研究が述べてきた方法論を通常学級へ適用する可能性について検討する。

## 2. 研究の方法

### (1) 研究の前提・領域の焦点化

国語教育と日本語教育とは、同じ言語を教育の対象としながらも、その言語観、教育観が大きく異なるため、両者の歩み寄りはない。この壁を乗り越えるために、「国語教育か日本語教育か」という二者択一を越えて難波（2008）の提唱する「母語教育」という観点から新しい言語教育を構想し、以下の様な研究を行う。

・ **理論研究**：述語中心文法を骨子とし、それに付ける枝葉を文成分とみなす。この考え方は依存文法と同じく、述語のヴァレンツに着目する。結果として完成した文は林氏や菅井氏の主張する「基本文型」のような形になるが、この基本文型を構成する文成分は「チャンク」というものとはほぼ等しい単位である。そのように考えるのであれば、助詞や語彙というものはそれ単独で教えるだけでなく、チャンクという単位で「音としてのまとまり」を与えるべきであるという要請へとつながることになる。そのような点を意識しつつライト教材を作る。

・ **調査研究**：語彙教育に関しては小学校国語科の教科書を対象に考察を行う。発話記録の調査に関しては、外国人児童が在籍する小学校における参与観察と録音した音声データを対象に考察を行う。

・ **実践研究**：上の理論研究でも述べた、「音のまとまり」を与える教育方法としてシャドーイングを実践したい。シャドーイングは既に外国語教育で用いられている手法であるが、この手法を国語教育に適用することにより、国語教育で行われている音読にはない効果が生まれることが期待される。その成果と課題を評価し、従来から国語教育で行われている音読指導との差異を明らかにする。

## (2)論文構成

序章 課題設定・目的・方法

第1章 実践の分析からみえる課題

1. 1. 現場の課題
1. 2. 新しい言語教育の必要性

第2章 課題を解決するための理論（文法論）

2. 1. 言語理論としての文法
2. 2. 教育理論としての文法
2. 3. 文型文法の拡張可能性

第3章 課題を解決するための語彙論

3. 1. 漢語語彙を拡充する必要性
3. 2. 非漢字文化圏出身児童の存在と問題の所在
3. 3. 動名詞
3. 4. 対象とする語彙
3. 5. 動名詞の意味特徴

第4章 各学年における具体的な学習内容（入門期ワークブックの試み）

4. 1. はじめに
4. 2. カリキュラムのちぐはぐさ
4. 3. 具体的なカリキュラムと実際の授業との齟齬
4. 4. リライト教材の必要性
4. 5. リライト教材作成に向けて考えるべきこと
4. 6. リライト教材作成に関する改善案
4. 7. リライト教材の可能性
4. 8. 残された課題
4. 9. 小学校国語科教科書における翻訳作品の指導の具体的事例 - 「お手紙」を対象にして-

## 第5章 テキストシャドーイングの理論

5. 1. はじめに
5. 2. 第二言語教育におけるシャドーイング
5. 3. 国語科教育における音読
5. 4. 日本人児童を対象とした調査

## 終章 (第6章) 研究の成果と展望

### 3. 研究の成果

本研究が明らかにしたことは以下の点である。

序章で述べたように、本研究では5つの目的が目指されていた。以下では、この5つの目的ごとに成果を述べていく。

#### 3. 1. (目的①)

目的①「実践の場における指導内容の不十分さを指摘し、新しい言語教育観を提示する。」

これについて、本論文第1章では、日本語教室で外国人児童が見せる様々な躓きを発話記録から確認し、新しい言語観への構想をあぶりだすことで研究の目的を達成した。

日本語教室で学ぶ外国人児童は、最終的に日本人児童と同じ通常教室での授業参加が目指されていることを考えれば、学校側が意図する教育内容は日本人児童が学ぶ内容と同じ内容である。つまり日本語教室における国語科の授業では、最終的に目指すべき学習内容は国語科教科書の内容である。そうであれば国語科教科書の理解が難しい児童には、それが可能になるように日本語教育を行えばよい — つまり日本語教育は、国語科教科書を理解するための下支え的な能力を与えればよいということになる。これは一見したところ、国語教育と日本語教育が相互に扶助しているように思えるが、実はそうではない。この二つの立場がそれぞれ異なった言語観に基づいて文法を記述していることを考えれば、相互扶助ではなく単なるパッチワークに過ぎないと表現すべき状況である。

ソシユールを俟つまでもなく、ことばの研究には通時的 (diachronic) なものと共時的 (synchronic) なものがある。国語教育はことばの共時的な面のみならず、通時的な面をも教育の対象とするが、日本語教育はどうしても共時的な面の教育が重視されるという傾向にある。つまり、同じ日本語を対象として教育を行うとしても、国語教育と日本語教育とでは、教育の射程が異なるのである。このような状況において、いかなる言語教育が必要とされるのかという点を確認した。

### 3. 2. (目的②)

目的②「国語科における教育文法の不備を指摘し、それを補完するために新しい文法観を提示する。」

これについて、本論文の第2章と第3章では、課題を解決するための方法として、文法と語彙について論じることで研究の目的を達成した。

国語教育が依拠する所謂教科書文法にしてもその不備は従来から指摘されていたものの、今日に至ってなお修正案が提案されている訳ではない。教科書文法の不備について述べ、それ代わるものとして述語中心文法を挙げた。しかし、文が構成される原理は述語が中心であったとして、どのようにその述語を中心としてコアの部分に枝葉を付けるのか、また文として完成した形態はどのようなものになるのかという点を明らかにするため、林、菅井の両氏による「基本文型」という考え方を提示した。この基本文型という考え方が教育上有用なのは、完成した文の姿を示しているという点と、文を構成する枝葉として文成分という単位を示している点である。文成分は意味をなす1つ以上のチャンクである。これは「自立語+付属語」といった後付けの説明ではなく、日本語話者として自然な音の切れ目を伴った単位であることから、教育上有用と考えられる。

第3章では、前章を受けて、主に非漢字圏の外国人児童を対象に漢語語彙を拡充する方策について論じた。非漢字圏の外国人児童にとって漢字学習は困難を極める。また、たとえ漢字を覚えたとしても、どの漢字とどの漢字を組み合わせる漢語表現を形成するかということになると、その困難はさらに増す。このような状況を改善するために、動名詞という語彙群の存在を指摘し、小学校段階で現れる動名詞を調査した結果を述べた。

### 3. 3. (目的③)

目的③「リライト教材による支援の可能性を検討する。」

これについて、本論文の第4章ではリライト教材の有用性を検討し、実際にリライト教材を作成することで、研究の目的を達成した。

外国人児童であっても、日本の小学校で学ぶのであれば国語科教科書の理解が目指される。その内容を理解するためのハードルを低くするための方法としてリライト教材作成の方法について検討し、実際に「かいがら」のリライト案を提示した。その際、先行研究では示されていない、リライト教材作成に際しての改善案についても検討を行った。また、リライト教材は、特別支援教育や通常教育への適用可能性を秘めているという点もここでふれ、一例として「お手紙」のリライト案を提示した。

### 3. 4. (目的④・⑤)

目的④・⑤「テキストシャドーイングの理論と、通常教育における効果を調査する。」

これについて、本論文第5章では、シャドーイングの理論を検討し、日本語を母語とする児童を対象に調査を行った結果について述べ、研究の目的を達成した。

シャドーイングは外国語教育において効果を上げている方法であるが、それを国語科の指導に導入することをここで提案した。尤も国語科にも音読という方法があるが、それはシャドーイングとは認知的負荷の大きさが異なる。シャドーイングは聞くことと声に出して読むことが即時性を以て行われるため、学習者は教師の発話を聞くことに集中することが求められ、そのため認知的負荷も大きいものとなる。また、教師の読むスピードについて発話するため、声に出して読む際の「音のまとまり」(チャンク)を意識できる。つまり、学習者には「音のまとまり」を伴った音声の入力/出力がもたらされるという点でシャドーイングの方が効果的であると思われる。また、テキストシャドーイングを用いることで読解能力と聴解能力の統合が図られることが期待されるのではないかということを仮説として、第5章4節ではH県B小学校において日本人児童を対象にテキストシャドーイングの実践を行った結果について述べ、国語科教育の現場でシャドーイングの有効性を検証した。